

教材活用例(5) 「大崎上島 東野の櫓伝馬」

かいでんま

〔小学校高学年 主題：島の伝統を守る 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—大崎上島 東野の櫓伝馬—について〉

大崎上島は海運業や造船業で栄えた町である。櫓伝馬は昔この辺りでは最も速い船で、大きな船の水先案内や海賊から人を守る役目をしていた。さらに島で病人が出た時は救急車の役目をしたり、遭難した船があれば一番に駆けつけて救助したりした。

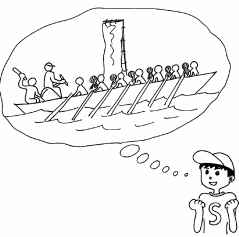
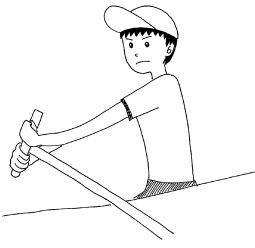
櫓伝馬競漕の歴史は古く、文政10(1827)年には既に行われていたという記録が残されている。

現在でも櫓伝馬競漕は夏祭りの主たる行事となっており町民はもちろん、島外に出ている人々もこの日には帰郷して祭りに参加するほど、たくさんの人で賑わう。



(イ) 4コマ絵

「子ども櫓伝馬競漕に対する憧れ」と「練習に対するつらさ・しんどさ」の両面をもつさとしが櫓伝馬や大崎上島町に対する祖父の熱い思いにふれ変容していく姿を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学5年生から夏祭り子ども櫓伝馬競漕に参加することができる。小学5年生のさとしは、期待に胸を膨らませている。	8月に入ってから櫓伝馬練習では、思ったよりも櫓が重い。手は痛いし、暑くて喉もからから。指導者からは厳しい声が飛ぶ。	祖父から櫓伝馬の歴史や櫓伝馬に対する願いを聞く。また島の人口減少や高齢化による後継者不足、経費負担の増大など、伝統存続の危機についても知らされる。	8月13日櫓伝馬競漕当日、櫓伝馬に乗り込み、櫓をぎゅっと握るさとし。「見る祭り」から「参加する祭り」へ。

イ 資料の解説

【作成の要点】

大崎上島町は広さでは県内3番目だが、橋が架かっていない島である。過疎化が進み、多くの若者は進学や就職を機に島外へ出ざるを得ない状況にある。しかし、島には民話や祭り、伝統文化が数多く残されており、幼いころから身近にふれている。ある年齢に達すると当然のように参加し引き継いでいくという風潮がある。そのことは祭りのある日は島外から多くの人が帰省することからもうかがえる。とはいえ、時代とともに価値観が多様化し、島の伝統文化に対する意識も薄れ、廃れつつあることは否めない。また、生活様式も変化し、昔のようにみんなで集まってひとつのことを行うことも難しくなっている。

多くの児童は大崎上島の自慢として櫓伝馬を挙げている。高学年になると櫓伝馬を漕ぐ体験をする。しかし、それは活動としての体験にとどまり、櫓伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについて深く考えるまでには至っていない。

そこで、そうした児童の実態を踏まえ、伝統文化の継承・郷土愛に視点をおき、資料を作成した。児童の櫓伝馬体験を生かした展開とするために、資料中において同様に櫓伝馬を漕いだ体験をもち、「櫓伝馬に対する憧れ」と「練習のつらさ・しんどさ」の両面をもつに至った主人公さとしを設定した。さらに、自分たちが郷土の伝統や文化を守り育てていかなければならないと考えるに至ったさとしの心の変容をもたらすキーパーソンとして、身近な存在で伝統を守ってきた「祖父」を設定し、自分自身に引きつけて考えられるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

大人の櫓伝馬競漕は地区対抗で行われる。どの地区が勝利を収めるかがその祭りの最大の関心事となるので、練習は大変厳しいものである。練習では漕ぎ手を引退した先輩たちが岸で見守っており、14人の漕ぎ手の櫓の合わせ方から方向転換の仕方、潮の流れの見方など岸から大声で容赦ない指導が飛ぶ。また、櫓伝馬の設計図は各地区の極秘資料で、船の幅や長さなど研究を重ね、少しでも速く進むように専用の船大工と密談を重ねて何度も造り直す。そして1年間櫓伝馬の倉庫を定期的に見回って手入れすることも怠らない。このような1年間をかけた熱い戦いも、打ち上げで花開き（お花代の集計）が終わると、「すべて終わり！終わったことはごちゃごちゃ言わない！！」と大変潔い。この潔さも櫓伝馬の良さであると言われている。

ウ 資料全文

（前置き）

大崎上島は昔、海運業や造船業で栄えていました。櫓伝馬はこの辺で一番速い船でした。そして大きな船の水先案内をしたり、海賊から船を守ったり、島で病人が出た時は救急車の役目をしたりしました。さらに遭難した船があれば、一番にかけつけて救助もしました。

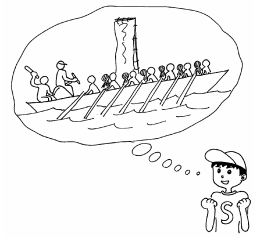
大崎上島東野地区では、毎年8月に住吉祭⁽¹⁾が行われます。この住吉祭は、海の安全や島の繁栄を願って始まり、200年の歴史があります。住吉祭の行事の中に、櫓伝馬競漕があります。櫓伝馬には14人のこぎ手と台振り⁽²⁾や剣櫓振り⁽³⁾、太鼓⁽⁴⁾、大櫓⁽⁵⁾といわれる人も乗り込みます。またそれを支えるために準備や炊き出し⁽⁶⁾など、地域を挙げて祭りを盛り上げます。

「大崎上島 東野の櫂伝馬」

大崎上島東野地区では夏になると住吉祭^{もよお}が催^{きようそう}され、有名な櫂伝馬競漕^{きようそう}でにぎわいます。櫂伝馬競漕とは地域ごとに船を出し速さを競うもので、祭りの見どころの一つとなっています。

「早く櫂伝馬に乗ってみたいなあ。」

さとしは、櫂伝馬競漕に毎年あこがれ続けてきました。そして今年は5年生、やっと櫂伝馬に乗ることができる年になりました。8月に入り、子ども櫂伝馬の練習日がやってきました。



桟橋^{ふるえ}に着くともう古江^{さかりだに}や盛谷^{しろみず}、白水の櫂伝馬が来ていました。太鼓^{たいこ}をたたくおじさんや船頭のおじさんたちが、櫂の準備をしてくれています。

「よーし、行くぞ！櫂をみんながそろえんと前に進まんぞー。力いっぱいこげよ。おじさんが太鼓をたたいたら、大きな声でかけ声かけてくれーよ。」

「はいー！」

みんな張り切っています。さとしは櫂をぎゅっと握^{にぎ}りしめました。

「ドンド ドンドンドン ヨイサッ ドンド ドンドンドン ヨイサッ。」

さとしは言われるとおりにやってみようと思うのに、櫂が重くて思うように動きません。

「そこ、4番櫂！しっかり漕げ！」

「体全体でこぐんじゃ。体を前に倒^{たお}せえ。声出せえ。」

「ヨイサのかけ声に合わせて櫂を引くんじゃ！」

「大きな声出さんと、櫂がそろわんぞお。」

櫂をそろえてこぐのに精一杯^{せいいつぱい}で、声どころではありません。くたくたです。暑くて汗がだらだら出てきます。のどもか



らからです。でも練習は続きます。一人だけ休むなんてできません。さとしは、だんだん櫂を持つ手に力が入らなくなっていました。

家に帰るとおじいちゃんが、にこにこしながらさとしに声をかけてきました。おじいちゃんは毎年祭りの世話をしている、1か月も前から何度も話し合いに出たり、町中にちょうちんを飾って回ったりしています。

「さとし、櫂伝馬の練習はどうじゃったか。楽しかったろう。」

「うーん。」

「どうしたんじゃ、元気ないのう？」

「上手にこげんのんよ。あんなにしんどい子ども櫂伝馬なんか、何であるんかのお。大人がやるのを見るだけでええのに・・・。」

「そうか・・・。」

それを聞いたおじいちゃんは、ぼつぼつと話を始めました。



「子ども櫓伝馬が始まったのは、わしが中学3年のときじゃった。それまで子どもは、大人の櫓伝馬練習が休憩のときにこがしでもろうとったが、祭りの当日はこがしてもらえんかったんよ。それが祭りでも大人みたいにこげるようになったもんじゃけえ、うれしいてのう。」

「おじいちゃんは櫓伝馬、しんどくなかったん？」

「そりゃあ、しんどいわい。櫓伝馬競漕は体力勝負じゃし、地区の代表いうプレッシャーがあるけん
のう。あの頃は子どもも大人もようけおったけえ、ちょっとでも手え抜いたり失敗したりしたら、
すぐに交替させられたもんよ。今はそのこぎ手も少のうなったのう。櫓伝馬もあと何年続けられる
かのう。」

「えっ？櫓伝馬、なくなるかもしれんのん？」

「毎年こぐ人を頼んで回るんじゃけど、みんなどどん年をとるし、出てくれる若いもんも少ないん
よ。実際人数がそろわんいうて競漕に出られん地区も出てきょうるしな。それに櫓伝馬や櫓や太鼓
は年々傷んでくるから、いろいろお金がかかるんよ。逆に島の人口は減るけん、みんなの負担も大
きいになってくるしのお。」

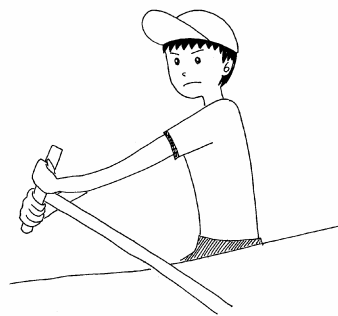
さとしは小さいころから見てきた櫓伝馬がなくなるかもしれないなんて信じられませんでした。さ
としは何と言ってよいか分からず、おじいちゃんの顔をじっと見ていました。

「不思議じゃのう、櫓伝馬いうもんは。みんなでヨイサ言うて声を張り上げて櫓を合わせようたら、
14人の人間がひとつの船になったみたいにすうーっと進むんじゃ。島全体がひとつになったような
あの感動は、櫓伝馬でしか味わえんかもしれん。今までわしもさとしのお父さんもみんなそれを味お
うてきて、今年はいよいよさとしも・・・いうんが、わしやあうれしいんよ。」

ふたりは、二子島の向こうに沈む真っ赤な夕日と櫓伝馬を、だまって見つめていました。

それから一週間がたち、今日は8月13日。まばゆいほどの青空が広がり、いよいよ子ども櫓伝馬
本番の日になりました。いつもは家からあまり出ないお年寄りも、この日ばかりは櫓伝馬競漕を見よ
うと杖をついて出かけ、栈橋の石段にこしかけています。島外からもたくさんの人が帰省していて栈
橋は人でいっぱいです。「今年も櫓伝馬競漕が見られてよかったねえ。
ありがたいねえ。」そんな会話が聞こえてきます。小さな子どもが「櫓
伝馬ってなあに？」と母親に聞いています。みんな暑い中笑顔で櫓伝
馬の方を見て応援しています。

さとしたちが櫓伝馬に乗りこもうとすると、岸の方から「がんばり
んさいよお！」と大歓声が上がりました。さとしは背筋を伸ばして櫓
伝馬に乗り込み、おじいちゃんの顔を思い浮かべながら櫓をぎゅっと握
りしめました。



【注】

- (1) 毎年8月13日、東野地区沿岸および白水港周辺で行われる祭。
- (2) 舟の面（おもて）で漕ぎ手を鼓舞する乗組員。
- (3) 舳先に陣取り、剣をかたどった長さ1m強の櫓（剣櫓）を操る乗組員。
- (4) 色鮮やかな女子供衣装に頭には花笠や烏帽子をかぶり、唄に合わせて太鼓を打ち鳴らす乗組員。
- (5) 櫓を握り、艫に進行方向を司る乗組員。
- (6) 飯を炊き、人々に配ること。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感させながら郷土愛を育む展開
～ 体験活動を想起させる資料提示の工夫 ～

(ア) 主題名 島の伝統を守る 4 - (7)

(イ) ねらい おじいちゃんの話聞いて櫓伝馬に乗りこんでいくさとしの気持ちを考えることを通して、ふるさとの伝統を大切に守っていこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「大崎上島 東野の櫓伝馬」

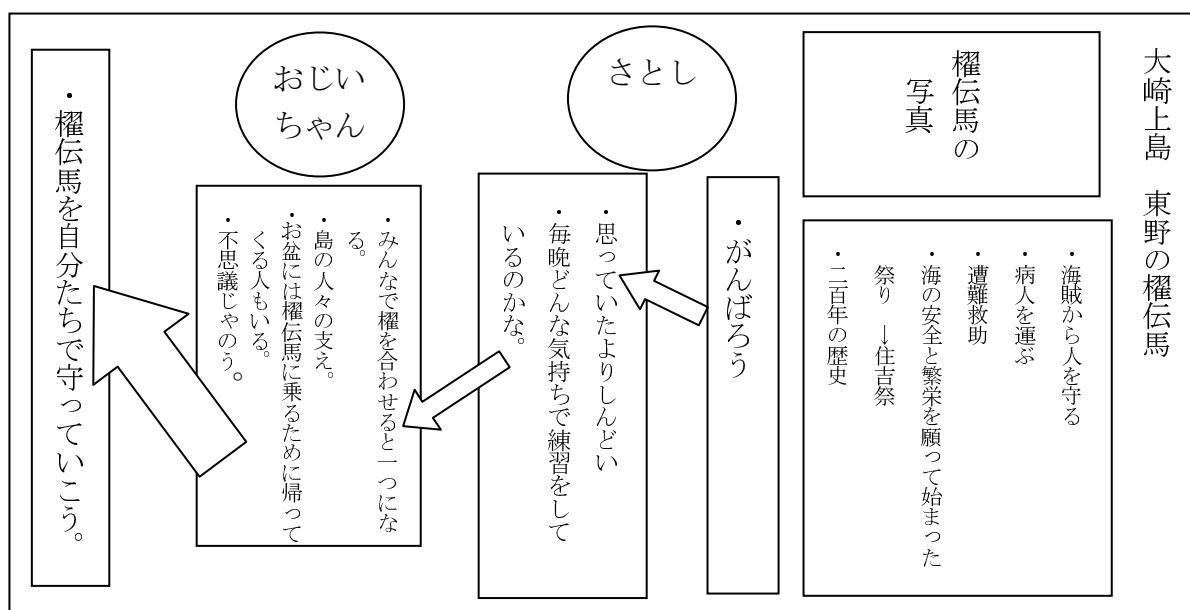
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 櫓伝馬を漕いだ時の気持ちについて話し合う。	○ みんなで子ども櫓伝馬を漕いでどんなことを感じましたか。 ・ 櫓を合わせるのが難しかった。 ・ 速く進んで気持ちよかった。	○ 住吉祭の写真を見せ、櫓伝馬を漕いだ時の気持ちを想起させる。
展開	2 東野の櫓伝馬の歴史を知る。 (前置きを読む) 3 「東野の櫓伝馬」のお話の前半を読んで話し合う。 4 後半を読んで話し合う。 5 さとしの櫓伝馬を漕ぐことへの決意を考える。	○ 住吉祭はどんな願いでつくられ、どんな歴史があるのでしょうか。 ○ 子ども櫓伝馬に乗る前、さとしはどんなことを考えていたでしょう。 ・ 憧れていた櫓伝馬にやっと乗れる。 ・ うれしい。 ・ がんばるぞ。 ・ うまく漕げそう。 ・ 絶対勝つぞ。 ○ 櫓伝馬練習の後、さとしはどんな気持ちになったでしょう。 ・ 思っていたほど面白くないなあ。 ・ しんどいなあ。 ・ 自分には出来そうもない。 ・ こんなに怒られるのならやめたい。 ○ おじいちゃんの話聞いた後、さとしはどんな気持ちでおじいちゃんと海を眺めていたのでしょうか。 ・ おじいちゃんたちがそんな気持ちで櫓伝馬をやっていたなんて知らなかったなあ。 ・ 自分が櫓伝馬をやめたら櫓伝馬競漕がなくなってしまうかもしれない。 ・ おじいちゃんや島の人たちは一生懸命櫓伝馬を続けてきたんだ。 ◎ 背筋を伸ばして櫓伝馬に乗りこみ、櫓をぎゅっとにぎったさとしはどんなことを思ったでしょう。 ・ 単なる競漕じゃない。 ・ 自分は町の伝統を引き継いでいるという誇らしい気持ち。 ・ みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・ 町の人々の期待を背負っているんだ。 ・ 櫓伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいくんだ。	○ 東野の櫓伝馬が始まった由来や歴史を簡単に紹介する。 ○ 櫓伝馬に乗ることへの期待感やさとしのやる気をおさえる。 ○ 自分が漕いだ時の気持ちを重ねさせる。 ○ 東野の人にとっての櫓伝馬についておさえる。 ○ 先祖代々の人々の思いが詰まっている櫓伝馬であることをおさえる。 ○ ワークシートに書きながら自分の考えを深める。 ☆ 郷土を愛し郷土に貢献したいという意欲を高めていった主人公の心情の変化を自分自身の体験に照らし、自分とのかかわりでとらえることができたか。
終末	6 ゲストティーチャーのお話を聴く。	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを知ろう。 ・ 子どもたちへの願い	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを聞き、櫓伝馬をはじめとする東野の伝統を大切にしようとする気持ちをもたせる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情(ざとし)	児童の意識の流れ
	中心人物(ざとし)	その他の人物		
○子ども権伝馬の練習前	ざとしは今年小学5年生なので、子ども権伝馬で漕ぐことができる。	(町の大人) 子ども権伝馬のためにたくさんの大人が準備をしている。	権伝馬への期待と喜び ・あこがれの権伝馬に乗ることができてうれし ・がんばるぞ。 ・絶対勝つぞ。	・権伝馬に初めて乗る前は自分も同じようにわくわくしたなあ。 ・権伝馬は思っているほど簡単じゃないよ。
○練習中	権が重くて思うように漕ぐことができない。声を出そうにもそんな余裕はない。怒られてばかりだ。	(町の大人) 「声を出さんとそろわんぞ。」 「そろわんと前に進まんぞ。」 「体を前に倒せ。」	権伝馬への失望 ・思ったより面白くない。 ・自分には出来そうもない。 ・しんどい。 ・怒られるのが嫌だ。	・その気持ち分かるなあ。 ・自分はそんなにしないでくんなかったよ。
○練習後おじいちゃんの話聞く。	おじいちゃんは権伝馬しんどくなくなったの。 権伝馬がなくなるかもしれないの？ おじいちゃんと黙って夕日と権伝馬練習の風景を見る。	(おじいちゃん) しんどいが楽しい方が大きかった。 経済面でも人手の面でも権伝馬競漕を継続することが難しくなっている。 権伝馬競漕を通して町がひとつになる感動を味わえる。	驚き・気持ちの変容 ・おじいちゃんたちはそんな気持ちで権伝馬競漕をやってきたんだな。知らなかったな。 ・権伝馬がなくなるのは嫌だな。自分が辞めるとなくなるのかな。 ・権伝馬競漕っていいものなのかな。	・権伝馬にそんな思いが込められているなんて考えたこともなかった。 ・生まれた時からあるからあつて当然のものと考えていた。 ・自分たちが引き継がなかったらなくなるかもしれないんだ。 ・確かに権伝馬はみんなの気持ちをひとつにするなあ。 ・今までただ権伝馬を漕いでいたけどこの町の大切な伝統行事を引き継いでいるんだなあ。大切にしていきたい。
○お祭りの当日	今年は祭りを「見る」側でなく「やる」側として町の様子を感じる。 背筋を伸ばして乗り込み権をぎゅつと握る。	(町の人々) ・お年寄りも子どもも島外の人にも楽しみにやってくる。 ・権伝馬を一生懸命応援している。	伝統を引き継ぐ決意 ・みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・町の人の期待を背負っているんだ。 ・権伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいくんだ。	

(カ) 板書例



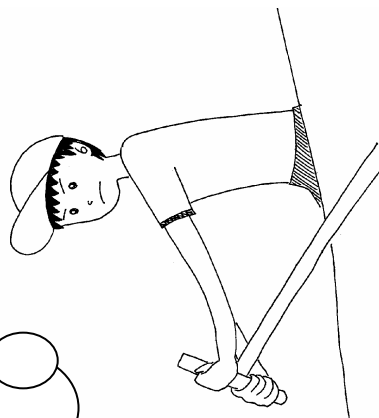
【板書の構成】

住吉祭や権伝馬を想起させるように写真を何枚か提示し、そのうち1枚を掲示する。さとしとおじいちゃんの気持ちを時系列かつ対比的に整理するとともに、「自分たちが権伝馬を漕ぐことは伝統を引き継ぐことにつながっている」ことに気づき、「自分たちが伝統を守っていく」という強い意志をもつに至る心情の変容を矢印でつなぎ、視覚的に明確にする。

(#) $\vdash \neg \neg \neg \neg \neg$

平成 年 月 日 () 昭陽田柳邊に「ふか」

大崎上島 東野の権伝馬』



這筋を毎夜二時三時に聴きに、權を物さへしに物にた
れしうたふたれしうたを聴いたしうた。

[illegible]

(2) 活用のポイント

本資料では、大崎上島町の誰もが知っている櫛伝馬競漕を題材として取り上げている。児童の実態としては、幼少の頃から櫛伝馬競漕を目にし、ある年齢に達すると参加するものであるという認識がある。しかし、アンケートによると、あまりにも身近な伝統文化であるがゆえに、櫛伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについてあまり意識していない。よって児童の実態に近い主人公さとしの気持ちの変容を追っていく形の発問構成で展開していく。同時に櫛伝馬の写真や櫛、太鼓などを提示して児童の興味を高め、自己の体験を想起させる。このことにより主人公と自分を重ね合わせ、自分の気持ちを振り返りながら伝統を継承していく意欲につなげる。

ア 発問の工夫

児童は実際に櫛伝馬を漕ぐ体験をしていることから、直接自分自身の気持ちを問うことは発言しにくい面も考えられる。したがって、資料の世界に浸らせ、変容していく主人公の気持ちをしっかり考えさせていく発問構成とした。

ただし、自分自身の体験を踏まえ、主人公の気持ちを考えていけるよう留意する必要がある。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入で櫛伝馬体験の写真を用い、自分たちの体験と重ねながら考えられるようにする。前書きの部分では、櫛伝馬の写真やキーワードを短冊にして黒板に貼りながら櫛伝馬の歴史についてまとめ、確認させる。また櫛伝馬の練習をする場面では、太鼓を使いながら話し口調で読み語りを進め、臨場感をもたせていく。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

終末においてゲストティーチャーの話を聴かせる。ゲストティーチャーには櫛伝馬の櫛を持ってきていただき、自己の体験や児童への願いについて話していただく。

(3) 授業の実践 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

児童は主人公さとしの気持ちを考えながら自分の体験を想起し重ね合わせて考えていた。例えば、櫛伝馬を漕ぐ前のさとしの気持ちについては、「今まで見てきたから自信があった。」「楽しみだけど少し不安。」という発言がみられ、櫛伝馬練習後のさとしの気持ちについては、「思っていた以上に大変だったのであまり出たくなかった。」という意見以外に「うまく漕がないとみんなに迷惑をかけてしまう。」「優勝できなかったらみんなに責められるのではないかも。」など、自分自身の実体験を踏まえた発言がみられた。

中心発問に対する反応は次の通りである。

- ・200年の歴史を続けていきたい。おじいちゃん分もがんばりたい。
- ・櫛伝馬競漕を楽しみに島に帰ってくる人もいる。私たちの世代で終わらせてはいけない。
- ・歴史を自分たちで切りたくない。自分たちのつらさだけでやめたら気まぐれでやめたことになる。
- ・今まで200年続いてきたつらさ、喜び、楽しさなど大切な思いが詰まっているんだ。
- ・初めのうちは自分のためにがんばっていたけど、今は人の思いも預かっていると思うから緊張するなあ。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入における実際に自分たちが行った櫛伝馬体験の写真の提示や資料の読み語りにおける実際に使用した太鼓による音響効果は、体験を想起し、さらに想像をふくらませていく上で効果的であった。そのことは、上記「ア 発問の工夫」における児童の発言からも窺い知れる。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

自分専用の櫛を持参して、人間性のにじみ出る話をしてくださった。その話は児童の心情に訴え、深い感銘を与えることができた。ただし事前に打ち合わせた内容と少しずれてしまったところも

あった。事前に内容の吟味やより綿密な打合せをする必要性を感じた。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

所属校では、権伝馬を漕ぐ体験の後、その体験を生かした道徳の時間を行った。その後、総合的な学習の時間に権伝馬について調べ学習をし、その内容を学習発表会で発表した。

このように、道徳の時間単独で本資料を学習するのではなく、各教科等を計画的に関連付けるなど総合単元的に学習を構想していくことでより一層の効果が期待できると考える。

（５）心のノートの活用

「心のノート」PP. 104-105 には「見つめよう わたしのふるさと そしてこの国」というページがある。この PP. 104-105 については、本時の事前指導や本時の終末での活用が考えられる。

本時の学習前に P. 105 「わたしのふるさとしょうかい」を記入しておく。そして、本時の学習後にもう一度振り返り、記入を付け加えていくことにより、自分自身の変容を感じとることができ、大変効果的であると考ええる。

また、終末において、ゲストティーチャーの話を聴いた後、P. 104 の詩を朗読することで、児童の中のふるさとに対する思いを余韻とともにさらに高めていくことが期待できる。

